

2017. 6. 27 (火)

多様性と自由と社会学

佐藤 哲彦

はじめに

1, 2年生では、私の顔を始めて見る人も多いかと思えます。フィールド社会学を担当して、社会問題論や医療社会学を教えています。私はこの四月に一年間の留学から戻ってきたのですが、その一年間はロンドンを拠点として、イギリスやオランダ、ポルトガルやスイスなどヨーロッパやレバノンなどの中東で、麻薬など薬物の調査をしていました。しかしいまだに日本では、私のやっているような薬物をめぐる調査研究には一体どのような意味があるのだろうか？と思っている人も多いようです。そこで今日はその辺りから話を始めて、今回のテーマとなっている自由について、とくに社会学と自由について、話してみたいと思います。

「他者」としての薬物使用者

私が薬物使用の研究を始めた頃は、薬物使用の研究それ自体が「薬物は悪いことは当たり前なのに、何でそんなことをする必要がるのか？」と批判されることも多くありました。しかしながら、最近は世の中も変化してきました。今では、雑誌や新聞だけでなくテレビでさえ、薬物使用のことを取り上げて、

しかもそれを犯罪ではなく病気であると伝えるようになってきました。そのために、薬物使用の研究も、世の中の役に立つ研究だと思われている節もあります。実際、その意味で私の研究を評価してくださる方もいるように感じます。

しかしながら、それはとても助かる勘違いでして、私が研究してきたのは、どうしたら薬物使用を犯罪ではなくすることが出来るのか、ということを目指するためではありませんし、薬物使用は実は病気である、ということを目指するためではありません。

そうではなくて、薬物使用というのはそれ自体社会現象であるのだから、それをさまざまな角度から考えることで、人と社会の関係や、人と物質との関係を明らかに出来たり、近代社会や現代社会をもっと違った角度から論じることが出来るのではないかと、そういうことを考えるために研究をしてきました。とくに薬物使用者という近代社会において「他者」とされてきた人たちと、私たちの関係を考えるために研究をして来ました。そして今回の調査もそのような観点から計画して実施しました。とくに今回の調査は私自身がずっと楽しみにしていたものでした。

どうして楽しみだったのかというと、それは日本ではなかなか会うことの出来ない人た

ちに会う機会だったからです。日本では全く知られていませんし、またそれについて調べている人もおそらくはいないのですが、今回の調査のきっかけは、数年前にある Drug users union の代表と話したことでした。Drug users union はまだ日本語がないのですが、あえて日本語に訳すと、「薬物使用者組合」となるでしょうか。要するに、現役の薬物使用者の組合です。別の言い方をすると、今現在、薬物を使っている人を中心に組織されていて、彼らのさまざまな権利の獲得やその保全を訴える団体です。これはおそらく日本では想像もつかないと思います。現役のユーザーがそれを訴えているのです。

しかし実はそのような組織は、世界各地にあります。ロンドンはその中心の一つで、だからこそロンドンに留学していたのですが、International Network of People Who Use Drugs、頭文字をとって INPUD、インブッドという組織があります。他にも、例えばタイにはアジアの使用者のためのネットワークがありますし、レバノンに北アフリカと中東の使用者のための組織があります。世界各地にそのような団体があります。

こういう話を聞くと、おそらく皆さんは、何か怪しい団体や秘密結社みたいなものを想像するかもしれませんが、まあ、分からないでもありませんが、しかし実はそんなわけもなく、例えば先の INPUD はロンドンのある大学内のビジネス用スペースにオフィスを構える、登録された正式な NGO です。このような薬物使用者の団体は、国際的には People who Use Drugs を略して PUD、ピーユーディーと呼ばれています。そしてこの PUD は昨年、2016 年春に国連が薬物問題に関する総会 UNGASS 2016 を開い

たときにも、Civil Society すなわち市民社会の関係団体としてイベントへの出席などが認められたものでした。

ひとつ、ついでに言いますと、最近国連で何かを話し合う場合には、加盟国だけが集まって議論するわけではありません。加盟国は国益だけで話をしがちですが、それは必ずしも実際の住人たちのことを考えたものにはならない可能性があります。そこで、市民社会の利益を代表するような人びと、主にそれは国際的に活動する NGO に関係した人々なのですが、彼らが市民社会 Civil Society という枠で参加するようになってきました。昨年はその一角に、薬物使用者たちが市民社会の関係者として出席していたということなのです。

つまり、世界は薬物使用者をそのようなものと捉えつつあるということなのです。これは知っておいていいことだと思います。

危険なモノを安全に使う

私は今回の調査で、ヨーロッパを中心に広がっている薬物問題への対処方法である、ハーム・リダクションというものの調査を行ってきました。今日のチャペルの話は新しい言葉が次から次に出てきて、大変聞きづらくて申し訳ないのですが、ハーム・リダクションというのは、文字通り、ハーム、つまりは有害性ですね、それをリダクション、つまり減らすという考え方で、簡単に言えば、薬物を止めさせるのではなく、その有害性を減らして安全に使い続けられるようにする、ということです。私は講義や学外で説明するときにはこういうのですが、「危険なモノを安全に使う」方法のことと理解してもらえれば良

いのではないかと考えています。止めさせるのではなく、安全に使用させる方法、これを薬物問題への対処方法とする考え方が、ハーム・リダクションというものです。具体的には、注射で麻薬を打つ人たちが、注射経路で感染症にならないように、注射針や注射器の交換を行ったり、不潔な場所で隠れて打って病気になるないように、安全で清潔な使用者ルームを提供したり、どうしても止められないのであれば密売されている麻薬ではなく、きれいな麻薬を処方したり、様々な方法で、安全な薬物使用を可能にするという方法なのです。

多分、皆さんには想像もつかないことかも知れませんが、何故想像がつかないかというと、おそらく薬物使用者とか麻薬とか聞くと、とんでもない怪物的な人間をイメージしたり、あるいは薬が原因で立ち上げることも出来ないような廃人のイメージを持ったり、あるいは薬をくれと叫び続けている人のようなイメージを持っているからだと思います。しかしそんな使用者はまずいません。いるにはいますが、そういう人たちはまず病院に収容されています。PUDのスタッフとして働いている人たちは多くの場合現役の使用者ですが、といっても全員ではないのですが、というのは社会政策に関心がある研究者やその候補者なども働いている場合がありますので、ですが、そのようなスタッフは普通の社会人と何も変わりません。むしろ、組織を運営していく知識や技術を持っていて、とても優秀な人たちです。あるインタビューでは、誰もが知っている超有名大学を出ていて、その大学の博士号も持っているスタッフに、どういう経緯でPUDで働くことになったのかを聞いたときに、それはだって私が使用者

だからだよ、と笑いながら言われて驚いたこともありました。そして自分が驚いたということで、私の中にもある種の先入観があったことに気づかされました。

です。そういう先入観や偏見を外して、薬物使用をめぐって「危険なモノを安全に使う」という観点から見ると、彼らはとくに薬物を使っていない人たちと何ら変わらない人たちです。私たちも実は「危険なモノを安全に使う」ということをさまざまな場で実践しているからです。たとえば、さまざまな化学薬品、化学調味料、医薬品、自動車、などなど。これらをどう安全に使うかは、実はこれらを使う使い方の中にあらかじめビルトインされていて気づきませんが、それらもまた危険なモノなのです。事故などが起こったときに、それが危険なモノであったことが明らかになるのです。

多様性と自由と社会学

そのような彼らは、したがって、私たちと同じ社会を生きる人間です。危険性の種類が違うだけです。そしてこのような観点が理解できないとしたら、それは彼らが違うからではなく、私たちが持っているイメージがそれを邪魔するからです。実証的に、そして論理的に考えることは、そのような先入観や偏見を乗り越える方法でもあるわけです。そして社会学とはその方法でもあるわけです。

その彼らを同じ社会で生きる人間とする視点こそ、社会学が最も重要視してきた「多様性」というものを生きる一つの実践です。多様性、最近ではダイバーシティと呼ばれますが、それは職場に女性や障害者の方々を増やしたりする勤務環境に限るような、狭い話で

はありません。それは実は私たちの自由というものを考えるときには、非常に重要な世界のありようでもあるのです。

今年の初めになくなった有名な学者に、ジグムント・パウマンというイギリスの大学に勤めていた社会学者がいます。パウマンは『社会学の考え方』という入門書で社会学とは何かを論じていますが、そのとき、多様性というものを社会的な考え方が導くものとして重要視しています。少し読んでみます。

「社会的思考は、わたしたちを多様性について敏感で寛容にしてくれる。それはこれまで相対的に見えなかった人間の条件をわたしたちが探求できるように、わたしたちの感覚を磨き、目下の経験を超えて新たな地平へと目を開いてくれる。…社会的思考は、反固定的な力として、それ自体が一つの力である。それは、抑圧的な固定性をもつと見られてきた社会関係を柔軟性に富むものにし、可能性の世界を開く。社会的思考は、視野を広げ、自由の実際的な有効性の範囲を広げる。」

私たちは、自分たちとは違うように見える、しかし実は同じ人たちのことを学び、知ることによって、自分自身とそのような他者との間に知らず知らずに引いてしまっている境界線を、もう一度考え直すことができるようになります。そして彼らの生活の論理やそれぞれの行為の意味を理解することを通じて、彼らと話し合ったり交流したりすることも出来るようになりますし、そのことで、実は私たちが彼らのように考えることが出来、生きるこ

とも出来る可能性を得ることになります。パウマンはそのような理解についてこう言っています。

「それは、わたしたちと「他者」とのコミュニケーションを、より円滑で相互の合意につながりやすいものにする。恐怖と敵意は寛容に置き換えられる。わたしたち全員の自由以上に個人の自由を保証するものはない。」

それはおそらく、こういう風に言い換えることも出来るでしょう。社会学というある種の思考と身体の動かし方を身につけると、もっと多様な生き方を自分たちのものとして認められるようになるということです。それが自由というもの、全てとは言いませんが、一つの重要な局面です。

つまり、自由とは、実はそのようにして、他者に対する想像力によって開かれる、私たち自身の可能性なのです。

それを成り立たせるために、私たちは調査をして人に会い話を聞いて理解しようとし、そうすることで、私たちの境界線は歩向こうに引き直されることとなります。境界線がなくなることは、残念ながら、おそらくはないでしょう。しかし、そのような作業を通じて、私たちは一步一步、他者に対する想像力と理解をもとに、自分自身の可能性と自由を達成していくことが出来ると思われるのです。

私にとって社会学というのは、そういう学問ですし、君たちにとっても、そうあって欲しいと思っています。

(社会学部教授)